

研究動向

宮沢賢治（韻文）

信時哲郎

賢治の韻文をめぐる話題としては、まず「雨ニモマケズ」における「ヒデリーヒドリ」論争に触れないわけにはいかない。平成元年に賢治の教え子である照井謹二郎の発表をきっかけに、読売新聞がこれを大々的に報じたことから始まった論争で、彼等は「ヒデリノトキハナミダヲナガシ」という詩句の「ヒデリ」が、手帳には「ヒドリ」とあることから、「ヒデリ」への校訂は誤りだと主張する。「ヒドリ」とは花巻では日雇い仕事でもらう金を意味し、賢治は日雇いに出なければならぬ小作人の生活を思いやったと考えられるからだという。入沢康夫や平沢信一らは、文法や修辞からも「ヒドリ」ではおかしく、賢治が「ひでり」を「ひどり」と書き間違えていた他の例などもあげて反論したが、平成十四年に岩手県住田町に建てられた「雨ニモマケズ」詩碑には「ヒドリ」が採用され、翌年、花巻市南城中学校にも「ヒドリ」の詩碑が建てられた。入沢はこれに関する文章のみを集めて『「ヒドリ」か、「ヒデリ」か』（書肆山田 H 22・5）を刊行したが、おそらく論争は加熱こそすれ、収束することはないだろう。というのも栗原敦（「資料と研究・ところどころ⑧」「賢治研究 110」宮沢賢治研究会 H 22・6）が指摘するように、この論争の背景には「本文校訂」という営みについての理解の深淺、学術的な權威の信・不信、それに一般社会次元の権力・反権力意識、商業主義的話題作りの思惑

などが重ねられ、さらに浜垣誠司が指摘するように「（ヒドリ説を主張する人は）あえて分布傾向を考えると、地元花巻に多い」（「宮沢賢治の詩の世界」<http://www.ihatov.co/> H 22・6・17）という事情があるからだ。論理的に語れば語るだけヒドリ派は地元・反権力・反權威といった意識で草の根的に連帯し、この先も論点がかみ合わないままに多くの言葉が費やされそうだとはいえ、賢治作品がいわゆる研究者以外にも開かれていたことから起こった論争だと思えば、「解釈と教材の研究」ばかりか「解釈と鑑賞」まで休刊となった国文学研究界としては、むしろ幸せな事態だと言わなければならない。賢治に関する事典といえど『宮沢賢治大事典』（勉誠出版 H 19・8）があり、それ以前には『新宮沢賢治語彙辞典』（東京書籍 H 11・7。改定準備中）などもあったが、このほど『宮沢賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂 H 22・12）が刊行された。『大事典』も『新語彙辞典』も、項目の採用や内容について多くの批判があったが、『イーハトヴ学事典』は、「基本的に、權威をめざしていない」。現在進行中の試行錯誤をも含めて、これからの研究のための方針、計画、手がかりを求め、あるいは現在未着手の新たな問題点、着眼の可能性をも、大胆に示しうるようにと「企画されたのだ」という。栗原（「資料と研究・ところどころ⑩」「賢治研究 113」 H 23・3）は、「書くのにふさわしい場所というものがあるのではないのでしょうか」と苦言を呈するが、確かにそう書きたくなるようなものが含まれているのも事実で、こうした事典の場合の想像力が、どこまで認められるべきかは判断が難しいところだ。

『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房）が平成二十一年三月に「別巻」を以て完結したのも話題となった。索引篇には、主要語句索引、書簡索引、年譜索引もあり、今後の研究に裨益する所は大きい。また、補遺篇には、この度の震災で有名になった「被害は津波によるもの最多く海岸は実に悲惨です」（S8・3・7）という大木実宛ハガキが新資料として収録されているほか、宮沢家の土蔵の梁の上部から見つかったという詩篇「停車場の向ふに河原があつて」も収録されている。この詩が発表されるとすぐに反応したのが浜垣や加倉井厚夫「賢治の事務所」（<http://www.beckoame.ne.jp/~kukurai/>）によるブログであった。近年、誰でも簡単に情報発信ができるということから、賢治に関連するブログやHPも多く立ち上がったが、正直なところ玉石混淆で、論理性や実証性に欠けていたり、どこまでがオリジナルかコピーかわからなかったり、筆者が誰かわからず、いかなるバックグラウンドの人間が、いかなる意図で書いたものか判断できないために、論文やオフレインで知っている人のものでないと信用できないというのが現状である。しかし、ブログには写真や映像、音声を好きなだけ使うことができるといふ圧倒的メリットがある。また、筆者と読者が簡単にコミュニケーションを取れることから、誤りを指摘されれば、すぐに修正ができる。論文であれば批判が出るまでに三年、修正にも三年ほど必要だろうが、数週間ですべてを完了できそうだ。研究教育機関では、現在も論文というメディアが中心的な位置にあるが、電子情報のデメリットを批判することで溜飲を下げるだけでなく、メリットの追求に努めるべきだろう。

さて、ここからは制作年代順、ジャンルごとに述べることにしたい。賢治による最初の表現様式は短歌だが、賢治を詩人や童話作家と呼ぶことはあっても歌人と呼ぶことはあまりない。それが端的に示すように、賢治の詩や童話の原型として、あるいは賢治の精神史、特異な感覚が表れる例として語られる場合が多く、今野寿美が言うように「賢治の短歌を短歌として積極的に論じ、位置づける作業についてはまだ今後に余地が残されている」（『大事典』）。しかし、望月善次が「賢治の歌」（H17・4・1）H20・3・16）を「盛岡タイムス」に千五十回にわたって連載し、佐藤通雅が『賢治短歌へ』（洋々社 H19・5）を刊行するといった成果も出ている。賢治研究会では「賢治研究109」（H22・3）から短歌の読書会記録が始まり、平成二十一年からは宮沢賢治学会イーハトーブセンターの特設セミナーで短歌が取り上げられるなど、注目度は確実に上がっているようである。

制作年代がはつきりせず、失われた紙葉もあつて、残ったものを繋げても完全な復元が困難だと言われるのが「〔冬のスケッチ〕」である。佐藤勝治が復元を試みるも果たせなかったが、島田隆輔は「〔冬のスケッチ〕現状に迫る試み／現存稿（広グループ・標準型（一）における）」（『宮沢賢治研究Annals』賢治学会 H10・3）等で、文語詩の素材源として「〔冬のスケッチ〕」を捉えることから部分的な再現を試み、『春と修羅（第一集）』における妹の死後半年間の空白期間に「〔冬のスケッチ〕」と「〔歌稿B〕」は清書されたのではないかといった提言も行った。

『春と修羅』に関しては、第一集への言及が多く、ことに「序」「小岩井農場」「春と修羅」そして「永訣の朝」をはじめとする妹トシの死とその後に書かれた作品群に論文が集中している。最近の成果としては、制作の舞台にこだわった岡沢敏男『賢治歩行詩考 長編詩「小岩井農場」の原風景』(未知谷 H17・12)があり、千葉賢治の会の機関誌「雲の信号7、8」(H20・9、H22・9)では、第一集を特集し、いわゆる人気作品はもちろん「青い槍の葉」「昴」「火薬と紙幣」「犬」「栗鼠と色鉛筆」なども取り上げられている。自分の興味に引きつけて言えば、拙論「宮沢賢治論 “鉄道の時代”と想像力」(「解釈と鑑賞」37) H21・6)で、第一集には鉄道に関連する作品が多く、鉄道詩集とも言えるのではないかと書いたが、加島篤「童話「月夜のでんしんばしら」の工学的考察」(「北九州工業高等専門学校研究報告44」 H23・1)が明らかにしたように、賢治の童話は驚くほど微細に当時の鉄道の状況を書き付けており、だとすれば鉄道をキーワードに第一集を細かく読み直せば、さらに様々な世界が開けてくるように思う。例えば、サハリン訪問の行程について、萩原昌好や入沢、ますむらひろし、浜垣らが論じ、藤原浩『宮沢賢治とサハリン』(東洋書店 H21・6)がこれに加わったが、さらに新しい展開も期待できそうだ。

第二、三集への言及については、天沢退二郎が「第三集」の場合には、ある程度つかみやすい一貫したものが感じられる。これに比べますと「春と修羅 第二集」というものはいろんな謎をはらみながら、また問題をはらみながら、個々の作品においてもちよつと要約しにくい、あるいは群れとしてもつかみに

くい点が多々あって、われわれがその魅力を十分に味わいあるいは内容を把握するということを阻んでいた」(「春と修羅 第二集」の《成立》の問題)『「春と修羅」第二集 研究』思潮社 H10・3)と述べるような事情がある。しかし、だからこそ第二集は研究者を引きつける存在でもあるようで、杉浦静が『宮沢賢治 明滅する春と修羅』(蒼丘書林 H5・1)を、木村東吉が『宮沢賢治《春と修羅》第二集研究』(渓水社 H12・2)を刊行し、その後も二人は第二集所収の作品をはじめとした多くの論考を発表している。また、榊昌子『宮沢賢治「春と修羅 第二集」の風景』(無明舎出版 H16・2)や伊藤眞一郎『宮沢賢治《旅程幻想》を読む』(朝文社 H22・11)などの刊行も続き、近年になって大竹智美や海老原有希らの新しい論者もこれに加わっている。

今までほとんど手が付けられていなかった文語詩研究もようやく注目されはじめた。平成九年から賢治学会では特設セミナーで文語詩を取り上げ、賢治研究会による『宮沢賢治 文語詩の森 第一〜三集』(柏プラーノ H11・14)、島田隆輔『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』(朝文社 H17・12)、信時『宮沢賢治「文語詩稿五十篇」評釈』(朝文社 H22・12)の刊行が続いた。信時は、島田が文語詩の成立について初期段階と再編段階に分けたことを評価しながら、賢治が社会改革を意図して文語詩を書いていたという点には疑問を呈し、多くの人々に愛読してもらうことを目指したのではないかとした。賢治研究会では『文語詩の森』の刊行後も文語詩を重視し、「賢治研究」08」(H21・12)から入沢が「文語詩難読語句」を連載し、村

上英一や大角修が文語詩論を載せている。また中四国宮沢賢治研究会の機関誌「論攷宮沢賢治」にも、島田をはじめ、平沢、木村、伊藤、奥本淳江、平山英子らの文語詩論が掲載されている。

詩全般については、中村三春が『係争中の主体』（翰林書房 H 18・2）で、「宮沢文芸を、複数の相反するメッセージを常に同居させた。パラドックスのテクストとして解明する」ことを試み、また、『修辞学的モダニズム』（ひつじ書房 H 18・5）で、賢治詩のレトリック分析を行っている。平沢は『宮沢賢治《遷移》の詩学』（蒼丘書林 H 20・6）で、賢治における文学の発生に遡り、名木橋忠大は「立原道造「イメージの氾濫」を超えて」（「東京大学国文学論集4」 H 21・3）で、賢治を「かなしいうそつき」だと書いた立原道造を分析する。小林俊子は『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』（勉強出版 H 23・8）で、賢治作品における「かなしみ」と「さびしさ」の語を総点検した。

韻文研究のみに限定して書いてきたが、そもそも賢治は『春と修羅』のみでなく、童話集『注文の多い料理店』も心象スケッチであると呼んでおり、童話に関する研究書や論文への目配りも欠かせない。また、宗教との関係、隣接する諸分野との関係も無視できない。ここで全てに言及することはできないが、秋枝美保が「宮沢賢治とアイヌ文学」（『異郷の死 知里幸恵、そのまわり』人文書院 H 19・8）等で指摘したアイヌ文学との関係、昆野伸幸が「近代日本の法華経信仰と宮沢賢治」（「文芸研究 163」 H 19・3）で示した国柱会の田中智学との関係、

岡村民夫が『イーハトーブ温泉学』（青土社 H 20・7）で示した温泉文化圏という視点、萩原孝雄が「宮沢賢治における「近代の超克」」（「賢治研究 112、114」 H 22・12、23・7）で展開した問題提起等については注意していく必要がある。また、近年、地質学の方面から加藤碩一<sup>ひろかず</sup>『宮沢賢治の地的世界』（愛智出版 H 18・11）、細田嘉吉『石で読み解く宮沢賢治』（蒼丘書林 H 20・5）、鈴木健司『宮沢賢治における地学的想像力』（蒼丘書林 H 23・5）、加藤・青木正博『賢治と鉱物』（工作舎 H 23・7）、加藤『宮沢賢治地学用語辞典』（愛智出版 H 23・9）等の仕事が相次いだ。

人物研究の領域では、高農時代の親友・保阪嘉内と賢治は大正十年夏に「訣別」したということになっているが、保阪庸夫がその後も交流が続いていたという証拠を新しく示している（「幻の手紙たちへ」『宮沢賢治 若き日の手紙』山梨文学館 H 19・9）。大<sup>だい</sup>明<sup>みょう</sup>敦<sup>とん</sup>も『心友 宮沢賢治と保阪嘉内』（山梨ふるさと文庫 H 19・10）で新資料を示した。また、同じ高農時代の友人である小菅健吉の書簡等を収録した『氏家町史料編 近代の文化人』（さくら市史編さん委員会 H 23・3）も刊行された。この他にも「ワルトラワラ 21」（ワルトラワラの会 H 16・11）から泉沢善雄の「賢治エピソード落穂拾い」が連載されており、これも見逃せない。

紙数の関係からこの五、六年の業績を中心に書いてきたが、より詳しくは「Annual」のビブリオグラフィ（著書や論文の要旨を掲載している）や「宮沢賢治研究文献目録」（<http://www.konan-wu.ac.jp/~nobutoki/>）等を参照されたい。